WEB版
菊陽町図書館
少女雑誌の部屋だより

わすれなぐさ

VOL.33／2022.12

少女雑誌の部屋から

「少女小説」と言えば、吉屋信子の存在なしに語ることはできません。信子の美しい文体が形作る感傷的な世界は、少女たちにとって大きな心の砦(とりで)となっていました。まだ女性が自立心を抱くことすら難しかった時代、自我を守る強い気持ちを持つ主人公の姿に、自分を重ね合わせていた少女も少なからずいたことでしょう。少女小説以外にも、女性を題材とした多くの作品を生み出した信子。彼女自身はどのような人生を送ったのでしょうか。

吉屋信子

Yoshiya Nobuko

1896-1973

新潟市出身。栃木高等女学校卒業。一時、日光小学校の代用教員となったのちに上京。
1916年（大正5）から『少女画報』に連載した「花物語」で女学生から圧倒的な支持を受け、人気作家となる。1919年（大正8）、大阪朝日新聞の長篇懸賞小説に当選した「地の果まで」で、筆一本の長い作家人生を切り拓いた。
以後、家庭小説、少女小説の分野で活躍し、キリスト教的な理想主義と清純な感傷性によって女性読者を中心に人気を博す。戦後は「鬼火」、「徳川の夫人たち」など女性史を題材とした歴史物、時代物を書き続け、ベストセラー作家となった。
吉屋信子記念館（鎌倉市）は信子の遺志により土地・建物などが寄贈されたもので、ありし日のままに保存されている。

信子の代表的な少女小説

「花物語」

ミッションスクールの寄宿舎に暮らす可憐で清らかな女学生たちが繰り広げる美しく感傷的な物語―
大正５年、『少女画報』に投稿して採用された「鈴蘭」と、これに続いて掲載された７編、さらに『少女倶楽部』、『少女の友』に発表した、花の名前がついた全５４※の短編から成る作品集。
当時“女学生のバイブル”と呼ばれるほどの大ベストセラーとなり、複数の出版社から単行本が出版された。近年においても、文庫化、漫画化されるなどし、レトロブームに乗って再び注目されている。

※単行本化される際、『少女倶楽部』掲載の最後の２作「薊(あざみ)の花」「からたちの花」が含まれていなかったため、この２編を除いた５２編を全容と解釈されることが多い

「わすれなぐさ」

ブルジョアで美しいわがままなお嬢様・陽子が心を寄せている女学校の同級生・牧子。個人主義で無口、風変りな性格の牧子が密かに仲よくなりたいと思っていたのは生真面目で硬派な優等生・一枝だった―３人の乙女の波乱万丈な日々と、美しい友情を描いた作品。（『少女の友』掲載）

「あの道この道」

実業家の大丸夫人は女児を出産するも衰弱のため息を引き取ってしまう。悲しみに暮れる大丸氏は、同じ日に女児を産んだ漁師の妻・お静を乳母として娘を預ける。しかし夫の不手際が元で赤ん坊がすり替えられてしまう―
入れ替わった２人を待ち受ける数奇な運命を描いた作品。昭和60年と平成17年にドラマ化された。
（『少女倶楽部』掲載）

参考にしたもの：『吉屋信子』（河出書房新社）、『日本児童文学大事典』（大阪国際児童文学館／編）、『生誕110年吉屋信子展』（県立神奈川近代文学館）